

その夫の言葉どおり、資料館へ寄せられる遺品の数は徐々に増え、今では約二千点にまでなりました。夫は、戦争資料館開館から、二〇〇二年（平成十四年）の十一月に亡くなる直前まで、講演などで外出する以外は、大半の時間をこの資料館内で過ごし、多くの来館者の方々へ戦争の悲惨さを伝え続けました。

### 夫の生きがいを胸に・・・

夫が亡くなった後、一時は資料館の閉館も考えました。しかし、夫が訴え続けた「二度と戦争を繰り返してはいかん」の思いを、今度は、自身の体験も含めて、引継ぎ、語り伝えていけたらと思っています。

この資料館の特徴は、実際に遺品に触れることができる展示物が多くあることです。鉄のヘルメットを被り、4kgの歩兵銃と30kgの荷物を背負い、堅い軍靴を履いて行軍する兵士たち。この資料館では、写真や文書ではなく、これらの実物を実際に身につけることで戦争を身体で感じ取ってもらっています。

### 武富登巳男氏が体験した戦争

戦時中、夫は中国や東南アジアで

旧日本軍の飛行隊に所属し、偵察機での偵察任務についていたそうです。当時の偵察機は、少しでも燃費を稼ぎ、航続距離を伸ばす為に、機関銃などの武器は何も積んでなく、機乗する兵士も拳銃一丁を携帯するだけだったそうです。撃墜され生き残り、捕虜になりそうになつた時、自害するための拳銃として。

終戦の翌年に、名古屋に復員（戦

地から日本に帰ってくること）した夫は、栄養失調のためしばらくは実家のある大洗で養生（休息をとること）していたそうです。当時は、戦地でも内地（日本国内のこと）でも食料が不足し、弾や爆弾で亡くなるだけでなく、食べ物がなく餓死する兵隊さんも多かつたそうです。

### 戦時中の私の体験

今の飯塚市目尾に住んでいた私は、一九四二年（昭和十七年）に高等女学校を卒業し、翌年小学校の代用教員となりました。当時の子どもたちも、今の子どもたちと変わらず元気で、たくましかったですね。

終戦近くになると、ここ筑豊でもよく空襲警報や警戒警報が鳴り、授業を中断して、子どもたちに防空頭



● 教員時代の武富智子さん（最前列中央）と子どもたち（昭和18年）

モノがない時代ということ、子どもたちの裸足姿が物語る。

「靴をはいてる子は少なかったですね。今みたいに靴屋さんに靴が並んでいるなんてことはなく、靴そのものがなかなか手に入らない時代でした。靴をはいてる子も、兄や姉のお下がりなどで、大事に大事にはいていました。皆が、モノを大事にしていました。」